

開催地名：群馬県安中市	
開催日時	令和元年 11 月 22 日（金） 14：00 ～ 15：30
開催場所	安中市松井田文化会館
語り部	松田 富子 （岩手県遠野市）
参加者	一般住民 約 120 名
開催経緯	群馬県には自然災害に対する安全神話があり、当市においても近年大規模な災害が発生していないため、安中市は安全な地域と思っている住民が多く、いかに「被災」に対する現実感をもってもらうかが課題となっている。今回語り部のお話を伺うことで、災害に対する認識を改め、防災意識の向上につなげたい。
内容	（１）はじめに 岩手県遠野市は、東日本大震災発生時、被害の大きかった地域に向けて精力的に後方支援を行った。当時私は 遠野市婦人総合消防協力隊に所属していた。 遠野市は古くから交通と交流の要衝として、多くの人と物と心の結節点として発展してきた。また活断層もなく、花こう岩地質で安定した地盤を持つ遠野市は、古くから災害に強い町とされていた。平成 19 年には地震、津波災害における後方支援拠点施設整備構想をまとめ、いつ起こるか分からない災害に備えてきた。そのような環境下で、平成 23 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分、国内観測史上最大級の地震が発生した。国内の最大震度は震度 7。遠野市でも震度 5 強を観測し、市内の至る所に被害を及ぼした。市役所本庁舎中央館が全壊、市内全域で停電も発生したのみならず、道路や水道などのインフラも甚大な被害を受けた。 多くの市民が地域の集会所や地区センターに避難し、その数は 50 カ所、およそ 2,000 名に上った。雪の降りしきる中、市役所としては使えなくなった本庁舎中央館前の駐車場にテントを設営し、災害対策本部を設置。午後 3 時 28 分には市内全域に避難勧告が発令され、市民の安否確認と安全の確保、そして市内の被害状況の確認作業に努めた。発災と同時に、自衛隊、警察、消防、医療隊を始めとした救助隊の受け入れの準備が進められた。これまでの訓練が生かされ、いち早く、後方支援拠点の提供の動きがスムーズに展開された。 （２）支援活動 発災から 11 時間後の 3 月 12 日午前 1 時 40 分、1 人の男性が大槌町から峠を二つ越えて災害対策本部に飛び込んできた。現地の凄惨な被害状況を語り、窮地を訴えた。歴史的にもつながりが深く、多くの親類縁者がいる隣町の窮地を見捨てるわけにはいかない。そうした思いから市内に備蓄してあった物資を集め、明るくなるのを待って職員が現地へ出発。この動きが後方支援活動の始まりとなった。また、翌 13 日には後方支援活動の本格化を図るため、遠野市

後方支援活動本部を設置。その後は職員を被災自治体へ派遣し、現地での支援に当った。さらに3月28日に、継続的な支援活動の展開を図るため、沿岸被災地後方支援室を設置し、被災地への支援を続けた。

遠野市の活動は、行政だけではなく多くの市民と心をつなげた官民一体の後方支援活動へとつながった。被災地へと届けられた炊き出しのおにぎりは14万食にも上り、そのほとんどが、地域の人たちが持ち寄ったお米を、日赤奉仕団や地域婦人団体協議会などの人たちが心を込めて握った。停電で電気釜が使えないためガス釜を5個使い、18升の米を1日に6～7回炊いた。炊き出しには慣れていたが、やはり数多く作るのは大変だった。ラップの上から握り、皆「熱い、熱い」と言いながらも心をこめて握った。市民が率先して提供した物資は、駆けつけた高校生たちが仕分けをし、被災地のニーズの把握に努めながら送り届けた。

また、発生から11日後の3月22日からは、市民ボランティアを被災自治体へ派遣し作業に当たった。市内の入浴施設の無料開放やバスの送迎など、近隣市町村だからこそできる身近な支援活動を展開した。ボランティア活動は、民間ならではのスピード感で被災地のニーズにあった支援活動が展開されるとともに、国内外からの多くのボランティアを受け入れ、被災地での復旧復興支援活動に尽力した。大人だけではなく子どもたちも、自分たちにできることを考えながら支援活動を行った。



開催地より

震災当時、遠野市婦人消防協力隊のお立場で、発災直後から、住民の安否確認、避難者への炊出し活動を実施された語り部から、テレビや新聞では伝わらない被災地の状況や被災した方からしか聞くことができない当時の心情や心労を聞くことができ、非常に有意義な講演であったと感じた。